

岷山の隠士

国枝史郎

青空文庫

1

「いや彼は隴西ろうせいの産だ」

「いや彼は蜀しよくの産だ」

「とんでもないことで、巴西はせいの産だよ」

「冗談を云うな山東さんとうの産を」

「李広りこうの後裔だということだね」

「涼武昭りようぶしょう王おう鬲かくの末だよ」

——青蓮居士せいれんこじ謫仙人たくせんじん、李太白の素性なるものは、はつきり解わかっていないらしい。

金持が死ぬと相続問題が起こり、偉人が死ぬと素性争いが起こる。

偉人や金持になることも、ちよつとどうも考えものらしい。

李白十歳の初秋であつた。県令の下もとに小奴となつた。

ある日牛を追つて堂前を通つた。

県令の夫人が欄干よに倚り、四方あたりの景色を眺めていた。

穢らしい子供が、穢らしい牛を、臆面もなく追って行くのが、彼女の審美性を傷付けたらしい。

「無作法ではないか、外よそをお廻り」

すると李白は声に応じて賦ふした。

「素面欄らんこう鉤こうニ倚り、嬌声外がいとう頭ニ出ツ、若シ是織女ニ非ズンバ、何ゾ必シモ牽牛ヲ問ハ
ン」

これに驚いたのは夫人でなくて、その良人おとこの県令であつた。

早速引き上げて小姓とした。そうして硯席いんせきに侍はべらせた。

ある夜素晴らしい山火事があつた。

「野火山ヲ焼クノ後、人婦レドモ火帰ラス」

県令は苦心してここまで作つた。後を附けることが出来なかつた。

「おい、お前付けてみる」

県令は李白へこう云つた。

十歳の李白は声に応じて云つた。

「焰こうじつハ紅日ニ随ツテ遠ク、煙ハ暮雲ヲ逐おツテ飛ブ」

県令は苦々しい顔をした。それは自分よりも旨いからであつた。

五歳にして六甲を誦し、八歳にして詩書に通じ、百家を觀たという寧馨児ねいけいじであつた。田舎役人の県知事などが、李白に敵うべき道理がなかつた。

ある日美人の溺死人があつた。

で、県令は苦吟した。

「二八誰ガ家ノ女、飄トシテ来リ岸蘆ニ倚ル、鳥八眉上ノ翠ヲ窺ヒ、魚八口傍ノ朱ヲ弄ス」

すると李白が後を継いだ。

「緑髪ハ波ニ随ツテ散リ、紅顔ハ浪ヲ逐ツテ無シ、何ニ因ツテ伍相ニ逢フ、応ニ是秋胡ヲ想フベシ」

また県令は厭な顔をした。

で李白は危険を感じ、事を設けて仕を辞した。

詩的小人というものは、俗物よりも嫉妬深いもので、それが嵩ずると偉いことをする。

李白の逃げたのは利口であつた。

剣を好み諸侯を干して奇書を読み賦ふを作る。——十五歳迄の彼の生活は、まずザツとこ

んなものであった。

年二十てきとう性儻、縦横の術を喜び任侠を事とす。——これがその時代の彼であった。財を軽んじ施しを重んじ、産業を事とせず豪嘯す。——こんなようにも記されてある。

ある日喧嘩をして数人を切った。

土地にいることが出来なかった。

このころ東巖とうがんし子という仙人が、岷山みんざんの南に隠棲していた。

で、李白はそこへ走った。

聖フランシスは野禽を相手に、説教をしたということであるが、東巖子も小鳥に説教した。彼は道教の道士であった。

彼が山中を彷徨さまよっていると、数百の小鳥が集まって来た。頭に止まり肩に止まり、手に止まり指先へ止まった。そうして盛んに啼き立てた。

それへ説教するのであった。

李白はそこへかくまわれることになった。

ある日李白が不思議そうに訊いた。

「小鳥に説教が解わかりましようか？」

「馬鹿なことを云うな、解るものか。あんなに無暗むやみと啼き立てられては、第一声を通りやアしない」

「何故集まつて来るのでしょうか？」

「俺が毎日餌をやるからさ。小鳥にもてるのもいいけれど、糞を掛けられるのは閉口だ。一度彼が外出すると、彼の道服は鳥の糞で、穢けがならしい飛白かすりを織るのであった。

「一体道教の目的は、どこにあるのでございましょう？」

ある時李白がこう訊いた。

「つまりなんだ、幸福さ」

「幸福を得る方法は？」

「長命ながいきすることと金を溜めることさ」

洵まことにあっさりした答えであった。

2

「どうしたら金が溜まりましたしょう？」

「働いて溜めるより仕方がない」

「その癖先生はお見受けする所、ちつとも働かないじゃありませんか」

「うん、どうやらそんな格好だな」

「働かないで溜める方法は？」

「よくこの次までに考えて置こう」

一向張り合いのない挨拶であった。

「どうしたら長命が出来ましょう」

「いろいろ方法があるらしい」

「それをお教え下さいませんか」

「俺には解っていないのだよ」

「物の本で読みました所、内丹説、外丹説、いろいろあるようでございますね。

梶ほうぼくし木子

などを読みますと」

「ほほう、それではお前の方が学者だ。ひとつ俺へ話してくれ」

李白これには閉口してしまった。

ある日東巖子が李白へ云った。

「天とは一体どんなものだろう？」

「ははあこの俺を験たぬす気だな」

すぐに李白はこう思った。

「道教の方で申しますと、天は百神の君だそう、上帝、びんてん旻天、皇天などとも、皇天上帝、旻天上帝、維皇上帝、天帝などとも、名付けるそうでございますが、意味は同じだと存じます。天は唯一絶対ですが、その功用は水火木金土、その気候は春夏秋冬、じつげつせい日月星辰を引き連れて、ふうしゅうし風師雨師を支配するものと、私はこんなように承うけたまわつて居ります」

「ふうん、大変むずかしいんだな。俺にはそんなようには思われぬよ。色が蒼まんまくて真丸まるで、その端が地の上へ垂れ下っている。こんなようには思われぬがな」

これには李白もギャフンと参った。

「地についてはどう思うな？」

これは浮雲あぶないと思ひながらも、真面目に答えざるを得なかつた。

「地は万物の母であつて、人畜魚虫山川草木、これに産れこれに死し、王者の最も尊敬するもの、冬至の日をもつて方ほうたく沢に祭ると、こう書物で読みました」

「お前の云うことはむずかしいなあ。俺にはそんなようには見えないよ。変な色の、変に凸凹した、穢けがならしいものにしか見えないがね」

これにも李白は一言もなかった。

「お前は人の性をどう思うね？」

「はい、孔子に由る時は、『人之性直。罔之生也。幸而免』ひとのせいちよく これをくらますはせいなり。さいわいにまぬかれよこうあつたように思われます。しかし孟子は性善を唱え、荀子は性悪を唱えました。だが告子は性可能説を唱え、又楊雄、韓愈等は、混合説を唱えましたそうで」

「だがそいつは他人の説で、お前の説ではないじゃないか」

「あつ、さようでしたね」

「で、お前はどう思うのだ？」

「さあ、私には解りません」

「解るように考えるがいい」

「あの、先生にはどう思われますの？」

「俺か、俺はな、そんなつまらない事は、考えない方がいいと思うのさ。形而上学的思弁
といつて、浮世を小うるさくするものだからな」

これには李白は何となく、教えられたような気持がした。

「不味い物ばかり食っていると、肉放れがして痩せてしまう。美味物を食べ美味物を」

こう口では云いながら、稗ひえだの粟あわだの黍きびだのを、東巖子は平気で食うのであった。
 「綺麗な衣裳きものを着るがいい。そうでないと他人ひとに馬鹿にされる」

こう云いながら東巖子は、一年を通してたった一枚の、穢けがい道服を着通すのであった。
 「出世をしろよ、出世をしろよ、いい主人を目つけてな」

こう云いながら東巖子は、山から出ようとはしないのであった。

彼は言行不一致であつた。

それがかえつて偉かつた。

彼は盛んに逆理を用いた。

李白は次第に感化された。儻てきとうふき不羈ふきの精神が、軽快洒脱の精神に變つた。

ある日突然東巖子が云つた。

「お前は山川をどう思うな？」

「山は土の盛り上つたもの、川は水の流れるもの、私にはこんなように思われます」

「さあさあお前は卒業した。山を出て世の中へ行くがいい」

——で、翌日岷みんさん山さんを出た。

3

開元十二年のことであつた。

李白は出でて襄漢じょうかんに遊んだ。まず南洞庭どうていに行き、西金陵揚州にしきんりようように至り、さらに汝海じょかいに客となつた。それから歸つて雲夢うんぼうに憩つた。

この時彼は結婚した。妻は許相公きよそうこうの孫娘であつた。

数年間同棲した。

さらに開元二十三年、太原たいげん方面に悠遊した。

哥舒翰かじよかんなどと酒を飲んだ。

また郡しやうぐんの元參軍げんさんぐんなどと、美妓を携えて晋祠しんしなどに遊んだ。

やがて去つて齊魯せいろうへ行き、任城にんじやうという所へ家を持つた。孔巢父こうそうほ、裴政はいせい、張ちやうし

叔明ゆくめい、陶とうべん、韓準かんじゆんというような人と、徂徠山そらいざんに集つて酒を飲み、竹溪の六逸

と自称したりした。

こうして天寶元年てんぼうとなつた。

この時李白四十二歳、詩藻全く熟しきつていた。

会稽かいけいの方へ出かけて行つた。

剡中えんちゆうに呉筠ごいんという道士がいた。

二人はひどくウマが合った。共同生活をやることにした。

東巖子とうがんしに比べると呉筠の方は、ちよつと俗物の所があった。それだけにその名は喧伝されていた。

時の皇帝は玄宗であつた。

「剡中の呉筠を見たいものだ」

こんなことを侍臣に洩らした。

呉筠の許へ勅使が立つた。

出て行かなければならなかつた。

「おい、お前も一緒に行きな」

「うん、よし来た、一緒に行こう」

李白は早速行くことにした。

やがて二人は長安へ着いた。

長安で賀知章がちしやうと懇意になつた。

賀知章は李白を一見すると、驚いたようにこう云つた。

「君は人間なのか仙人なのか？」

「どうもね、やはり人間らしい」

「仙人が誤って人間になると、君のような風采になるだろう。君は謫たくせられた仙人だよ」

「まあさ、見てくれ、謫仙人の詩を」

李白は旧稿を取り出して見せた。

賀知章はすっかり参ってしまった。

「素晴らしい物を作りやアがる。こいつちよつと人間業じやアねえ。君のような人間に出られると、僕の人気なんかガタ落ちだ。だがマアマア結構なことだ。御世万歳、文運隆盛、大いに友達に紹介しよう」

「話せる奴でもいるのかい？」

「杜甫という奴がちよつと話せる」

「聞かないね、そんな野郎は」

「だが会って見な、面白い奴だ。だがちつとばかり神経質だ」

「そんな野郎は嫌いだよ」

「まあまあそういわずに会って見なよ。君とは話が合うかもしれない。ひよつとかすると

好敵手かもしれない」

「幾歳ぐらいの野郎だい？」

「そうさな、君よりは十二ほど若い」

「面白くもねえ、青二才じゃアないか」

「止めたり止めたり食わず嫌いはな」

「どうも仕方がねえ、会うだけは会おう」

杜甫は名門の出であった。

左伝癖さでんへきをもつて称された、晋の杜預の後胤であった。曾祖の依芸いげいは鞏きやう 県けんの令、祖父の審言しんげんは膳部員外郎であった。審言は一流の大詩人で、沈佺期ちんせんき、宋之門そうしもんと名を争い、初唐の詩壇の花形であった。

父の閑閑かんかんは奉天ほうてんの令で、公平の人物として名高かった。

杜甫は随分傲慢であった。弱い癖に豪傑を気取り、不良青年の素質もあった。ひどく愛憎が劇しかった。それに肺病の初期でもあった。立身出世を心掛けた。その顔色は蒼白く、その唇は鉛色であった。いつもその唇を食いしばっていた。人を見る眼が物騒であった。

相手の弱点を見透しては、喰い付いて行くぞというような、変に物騒な眼付であった。威嚇的な物の云い方をした。その癖すぐに泣事を云った。

決して感かんじのいい人間ではなかった。

体質から云えば貧血性であったが、気質から云えば多血質であった。

いつも不平ばかり洩らしていた。

だが意外にも義理堅く、他人の恩を強く感じた。

忠義心が深かった。

義理堅いのをのぞきさえすれば、彼は実に完全に、近代芸術家型に嵌まった。

彼の幼時は不明であった。

が、彼の詩を信じてよいなら——又信じてもよいのであるが——七歳頃から詩作したらしい。

「往昔十四五、出デテ遊ブ翰かんぼく墨場、斯文崔魏しぶんさいぎノ徒、我ヲ以テ班揚ニ比ス、七齡思ヒ即チ壯、九齡大字ヲ書シ、作有ツテ一囊のうニ満ツ」

すなわちこれが証拠である。

「七歳ヨリ綴ル所ノ詩筆、四十載さい、向フ矣い、約千有余篇」

こんなことも書いてある。

開元十九年二十歳の時、呉越方面へ放浪した。

四年の間を放浪に暮らし、開元二十三年の頃、京兆の貢拳こうきよに応じたものである。
だが旨々うまうま落第してしまった。

4

彼はすっかり落胆した。

奉天の父の許へ帰って行つた。泰山たいざんを望んで不平を洩らした。

二年の間ブラブラした。

それから齊せいや趙ちように遊んだ。

それから長安へ遣つて来たのであつた。

李白と杜甫との会見は、賀知章が心配したほどにもなく、非常に円滑に行なわれた。

会后李白が賀知章へ云つた。

「彼は頗すこぶる人間臭い。それが又彼のよい所だ。詩人として当代第一」

また杜甫はこう云った。

「なるほどあの人は謫仙人だ。僕はすっかり面喰ってしまった。詩人としては第一流、とても僕など追っ付けそうもない」

互いに推重をしあつたのであつた。

李適之^{りてきし}、汝陽^{じよよう}、崔宗之^{さいそうし}、蘇晋^{そしん}、張旭^{ちやうぎよく}、賀知章^{がちしやう}、焦遂^{しやうすい}、それが杜甫と李白とを入れ、八人の団体が出来上つてしまった。

飲んで飲んで飲み廻つた。

いわゆる飲中の八仙人であつた。

酒はあんまりやらなかつたが、一世の詩宗高適などとも、李白や杜甫は親しくした。

三人で吹台や琴台へ登り、各自^{めいめい}感慨に耽つたりした。

※慨するのは杜甫であり、物を云わないのは高適であり、笑つてばかりいるのは李白であつた。

高適の年五十歳、李白の年四十四歳、杜甫の年三十二歳であつた。

だがこの時代は李太白が、誰よりも詩名が高かつた。

玄宗皇帝が会いたいと云つた。

で、李白は御前へ召された。

誰が李白を推薦したかは、今日に至っても疑問とされている。

ある人は道士呉筠だと云い、ある人は玉真公主だと云い、又ある人は賀知章だと云った。すべて人間が出世すると、俺が推薦した俺が推薦したと、推薦争いをするものであるが、これも将しくその一例であった。

金鑾殿きんらんという立派な御殿で、玄宗は李白を引見した。

帝、食を賜い、羹あつものを調し、詔あり翰林かんりんに供奉ぐぶせしむ。——これがその時の光景であった。非常に優待されたことが、寸言の中に窺われるではないか。

彼は翰林供奉となつても、出勤しようとはしなかった。長安の旗亭に酒を飲み、いう所の管ばかりを巻いていた。

「李白に会いたいと思つたら、長安中の旗亭を訪ね、一番酔つぱらっている人間に、話しかけるのが手取早い。間違ひなくそれが李白なのだからな」

人々は互いにこんなことを云つた。

その時唐の朝廷に一大事件が勃発した。

渤海国ぼっかいの使者が来て、国書を奉呈したのであつた。

国書は渤海語で書かれてあつた。満廷読むことが出来なかつた。

玄宗皇帝は怒つてしまった。

「蕃書を読むことが出来なければ、返事をする事が出来ないではないか。渤海の奴らに笑われるだろう。彼奴ら兵を起すかもしれない。国境を犯すに相違ない。誰か読め誰か読め！」

百官戦慄して言なし矣であつた。

そこへ遣つて来たのが李白であつた。

飄々乎として遣つて来た。

「おお李白か、いい所へ来た。……お前、渤海語が解るかな？」

「私、日本語でも解ります。まして謂んや渤海語など」

「それは有難い。これを読んでくれ」

渤海の国書を突き出した。

李白は一通り眼を通した。

「では唐音に訳しましょう」

そこで彼は声高く読んだ。

「渤海奇毒きどくの書、唐朝官家に達す。爾なんじ、高麗こうらいを占領せしより、吾国の近辺に迫り、兵屢しばしば吾界さかいを犯す。おもうに官家の意に出でむ。俺われ如今耐たうべからず。官を差し来り講じ、高麗こうらい一百七十六城を將もつて、俺に讓与せよ。俺好物事あり、相送らむ。太白山の兔、南海の昆布、柵城の鼓、扶余の鹿、鄭てい頡ぎつの豚、率そつ賓びんの馬、沃州よくしゅう綿めん、泌河びんひつがの鮒、九都の杏、樂遊がくゆうの梨、爾、官家すべて分あり。若もし高麗を還かえすことを肯んぜずば、俺、兵を起こし来たつて廝殺せむ。且かつ那家いなげが勝敗するかを看よ」

皇帝はじめ文武百官は、すっかり顔色を変えてしまった。

「いま辺境に騒がせられては、ちよつと防ぐに策はない。一体どうしたらいいだろう」
風流皇帝の顔色には、憂うれが深く織り込まれた。

誰一人献策する者がなかつた。

5

すると李白が笑いながら云つた。

「文章で嚇おどして来たのです、文章で嚇して帰しましょう。蕃使をお招きなさりませ、私、面前で蕃書を認め、嚇おどしつけてやることに致します」

翌日蕃使を入朝せしめた。

皇帝を真中に顯官が竝んだ。

紗帽さぼうを冠り、白紫衣はくししいを着け、飄々と李白が現われた。勿論微醺さかを帯びていた。

座に就くと筆を握り、一揮して蕃書を完成した。

まず唐音で読み上げた。

「大唐天宝皇帝、渤海の奇毒に詔諭す。むかしより石卵は敵せず、蛇龍は闘わず。本朝運に応じ、天を開き四海を撫有し、将は勇、卒は精、甲は堅、兵は鋭なり。頡利きつりは盟に背いて擒とりこにせられ、普賛ふさんは鷲を鑄つて誓を入れ、新羅しらぎは緘錦の頌を奏し、天竺てんじくは能言の鳥を致し、沈斯ちんしは捕鼠の蛇を献じ、弘林ふつりんは曳馬の狗を進め、白鸚鵡かりようは訶陵より来り、夜光珠りんゆうは林邑より貢し、骨利幹こつりかんに名馬の納あり、沈婆羅ちんばらに良酢の献あり。威を畏れ徳に懷なまずき、静を買い安を求めざるなし、高麗命ふせを拒ぎ、天討再び加う。伝世百一朝にして殄滅す。豈あに逆天の咎徴、衝大の明鑒に非ずや。況いや爾わんは海外の小邦、高麗の附国、之を中国に比すれば一郡のみ。土馬芻糧万分に過ぎず。螳怒たぐまし是れ逞たくましうし、鵝驕不遜ごうなるが若ごときだに及ばず。天兵一下、千里流血、君は頡利とりこの俘とりこに同じく、国は高麗の続とならむ。方今聖度汪洋、爾が狂悖を恕す。急に宣しく過を悔い、歳事を勤修し、誅戮を取りて四夷いの笑となる母なれ。

爾其れ三思せよ。故に諭す」

実にどうどうたるものであった。

皇帝はすっかり喜んでしまった。

そこで李白は階を下り、蕃使の前へ出て行つた。文字通り蕃音で読み上げた。

蕃使面色土のごとく、山呼拝舞し退いたというが、これはありそうなことである。

奇毒、すなわち渤海の王も、驚愕来歸したということである。

「俺は長安の酒にも飽きた」

で、李白は暇を乞うた。

皇帝は金を李白に賜つた。

李白の放浪は始まつた。北は趙魏燕晋から、西は※岐まで足を延ばした。商於を歴て洛陽に至つた。南は淮泗から会稽に入り、時に魯中に家を持つたりした。齊や魯の間を往来した。梁宋には永く滞在した。

天宝十三年広陵に遊び、王屋山人魏万と遇い、舟を浮かべて秦淮へ入つたり、金陵の方へ行つたりした。

魏万と別れて宣城せんじょうへも行った。

こうして天宝十四年になった。

ひっくり返るような事件が起こった。

安祿山が叛したのであった。

十二月洛陽を陥いれた。

天宝十五年玄宗皇帝は、長安を豪塵して蜀に入った。

李白の身边も危険であった。宣城から漂陽にゆき、更に剡中えんちゅうに行き廬山に入った。

玄宋皇帝の十六番目の子、永王というのは野心家であったが、李白の才を非常に愛し、進めて自分の幕僚にした。

安祿山と呼応して、永王は叛旗を翻えした。弟の襄成王じょうせいおうと舟師しゅうしを率い、江淮こうわいに向かつて東下した。

李白は素敵に愉快だった。

「うん、天下は廻り持ちだ。天子になれないものでもない」

こんな事を考えた。

詩人特有の白昼夢とも云えれば、儻不羈てきとうふきの本性が、仙骨を破って迸したとも云えた。

意気頗る軒昂であつた。自分を安石に譬えたりした。二十歳代に人を斬つた、その李白の真骨頭が、この時躍如としておどり出たのであつた。

「三川北虜乱レテ麻ノ如シ、四海南奔シテ永嘉二似タリ、但東山ノ謝安石ヲ用ヒヨ、君ガ為メ談笑シテ胡沙ヲ静メン」

などとウンと威張つたりした。

「試ミニ君王ノ玉馬鞭ヲ借り、戎虜ヲ指揮シテ瓊筵ニ坐ス、南風一掃胡塵静ニ、

西長安ニ入ツテ日延ニ到ル」

凱旋の日を空想したりした。

ところが河南の招討判官、李銑といふのが広陵に居た。永王の舟師を迎え討つた。

永王軍は脆く破れた。

永王は箭に中つて捕えられ、ある寒駅で斬殺された。そうして弟の襄成王は、乱兵の兇刃に斃された。

李白は逃げて豊沢に隠れたが、目つかつて牢屋へぶち込まれた。

「どうも不可ねえ、夢だつたよ」

惘然として彼は呟いた。

「兵を指揮するということは、韻をふむよりむずかしい。そうすると俺より安石の方が、人殺しとしては偉いらしい。もう君王の玉馬鞭なんか、仮にも空想しないことにしよう……。ひよつとかすると殺されるかもしれないねえ。何と云つても謀反人だからなあ、もう一度洞庭へ行つて見たいものだ。松江の鱸を食つてみたい。女房や子供はどうしたかな？

幾人女房があつたかしら？ あつ、そうだ、四人あつたはずだ」

李白はちよつと感傷的になつた。

無理もないことだ、五十七歳であつた。

李白は皆に好かれていた。

新皇帝 肅 宗 に向かつて、いろいろの人が命乞いをした。

宣慰大使 崔 渙 や、御史 中丞 宋若思 や、武勳赫々たる郭子儀などは、その最たるものであつた。

そこで李白は死を許され、夜郎へ流されることになつた。

道々洞庭や三峡や、巫山などで悠遊した。

李白はあくまでも李白であつた。竄逐されても悲しまなかつた。いや一層仙人じみて

来た。人間社会の功業なるものが全然自分に向かないことを、今度の事件で知つてからは、

人間社会その物をまで、無視するようになってしまった。

乾元二年に大赦があつた。

まだ夜郎へ行き着かない中に、李白は罪を許された。

そこで江夏岳陽に憩い、それから潯陽しんようへ行き金陵へ行つた。この頃李白は六十一歳で

あつた。また宣城や歴陽へも行つた。

あつちこつち歩き廻つた。

到る所で借金をした。九割までは酒代であつた。

のべつに客が集まつて来た。

やがて宝応元年になつた。

ある県令に招かれて、采石江で舟遊びをした。

すばらしく派手やかな宮錦袍を着、明月に向かつて酒気を吐いた。

波がピチャピチャと船縁を叩いた。

十一月の月が水に映つた。

「ひとつ、あの月を捕えてやろう」

人の止めるのを振り払い、李白は水の中へ下りて行つた。

水は随分冷たかった。

彼の考えはにわかに変わった。

どう変わったかは解らない。

李白は水中をズンズン歩いた。

やがて姿が見えなくなった。

それつきり人の世へ現われなかった。

「李白らしい死に方だ」

人々は愉快そうに手を拍った。

東巖子とうがんしは岷山みんざんにいた。

相変わず小鳥の糞にまみれ、相変らずぼんやりと暮らしていた。

ある日薄穢い老人が、東巖子を訪れて来た。

「先生しばらくでございます」

「誰だったかね、見忘れてしまった」

老人は黙って優しく笑った。

なるほどまさしく薄穢くはあつたが、底に玲瓏たる品位があつた。人間界のものであり、同時に神仙のものである、完成されたる品位であつた。

で、東巖子は思わず云つた。

「おお貴郎あなたは老子様で？」

「いえ私は李白ですよ」

「いえ貴郎は老子様です」

東巖子は云い張つた。

「どうぞ上座へお直り下さい」

李白は平気で上座へ直つた。

数百羽の小鳥が飛んで来た。音を立てて庵の中へ入つた。

そうして東巖子の頭や肩へ……いや小鳥は東巖子へは行かずに、李白の頭や肩へ止まつた。すぐに李白は糞まみれになつた。

今でも岷山のどの辺りかに、李白とそうして東巖子とが、小鳥を相手に日向ひなたぼっこをして、住んでいる事は確かである。

青空文庫情報

底本：「国枝史郎伝奇全集 卷六」未知谷

1993（平成5）年9月30日初版発行

初出：「大衆文芸」

1926（大正15）年4月

※漢詩漢文の読み下し文の旧仮名づかいは底本通りです。また促音の大小の混在も底本の通りです。

入力：阿和泉拓

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年10月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

岷山の隠士

国枝史郎

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>